

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34311

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20730538

研究課題名（和文）保守化・個人化する現代日本における子どもたちの社会的紐帯

研究課題名（英文）Social Bonds among Japanese Students in the conserved and individualized Japan

研究代表者 小針 誠（KOBARI MAKOTO）

同志社女子大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：90388067

研究成果の概要（和文）：本課題研究は、保守化・個人化する現代日本において、学校成員（教師や生徒・児童）の自己意識、国家意識（排他的なナショナリズムも含む）、その中間集団としての「社会」（家族・友人・学校・地域社会・教会など）に対する意識に関して理論的・実証的に明らかにし、子どもたちにおける社会的紐帯の復権を目指す臨床的なアプローチを試みた。

研究成果の概要（英文）：I have tried to study theoretically and empirically the self-consciousnesses of teachers and students (including exclusive nationalism), "society" as a collective awareness of intermediate (such as local communities, schools, church, friends and family) in contemporary Japan. I tried clinical approach to rehabilitate and restore the social bonds among the children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 21 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 22 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：保守化、愛国心、個人化、社会的紐帯、教育改革、後期近代

1. 研究開始当初の背景

(1) 2006 年 12 月の教育基本法の改正などをはじめとして、政治主導の国家主義的な教育改革が進んでいる。これは戦後民主主義を支えてきた「個人」（個）から「国家」

（公）へと力点を大きく変えるものである。その一方、1980 年代以降のネオ・リベラリズム（新自由主義）の進行に伴い、個人化

が進行した。個人の問題・不満は、カウンセリング、新興宗教、ヒーリング（癒し）など、実効性が十分に明らかにされていない不透明な選択肢によって解決が目指されるようになった。

(2) それらは感情の重視をし、個人が自己解決や自己実現の力を高め、自己管理能力をつけ、自己責任を負うための自己教育力

が求められる点で共通している。それらはまた、弱肉強食の自由競争と社会的不平等・格差の拡大を招く危険性を伴う。

(3) 現代日本は、個人の問題の解決策をめぐって、個人の自助努力か国家の保守思想のいずれかに収斂し、中間集団としての「社会」という審級が見失われつつある。それは、新自由主義とグローバル化を背景に、〈社会的なるもの〉や〈社会的な個人〉に対する心性や意識が大きく後退し、バラバラに分断された個人が新たなアノミーに置かれていることを意味する。1980年代以降の日本社会の保守化とは、愛国心や心理主義（スクール・カウンセラーの導入）も含めて、アノミーの状態に置かれた個人に対して、問題の記憶そのものを忘却させ、国家主義や愛国心をもって個人の感情や問題を回収し、それをさらに強化する動きにほかならない。

2. 研究の目的

(1) 本研究課題の目的は、保守化・個人化する現代日本において、学校成員（教師や生徒・児童）の自己意識、国家意識（排他的ナショナリズムも含む）、その中間集団としての「社会」（家族・友人・学校・地域社会・教会など）に対する意識に関して理論的・実証的に明らかにし、子どもたちにおける社会的紐帯の復権を目指す臨床的なアプローチを試みることにある。

(2) その意義は個人化や保守化が子どもたちの意識に与える影響を「社会」意識との関連で理論的・実証的に明らかにするものである。また、理論的・実証的研究にとどまらず、その知見を児童・生徒や広く社会に還元し、学校現場で活かす臨床的な志向性をもつものである。

(2) 現在の子どもの多くは、保守化と個

人化の狭間で、「閉じた自己」に追い込まれているのではないか。その問題を抜け出すひとつの鍵として、個人が追い詰められているイデオロギーから引き離し、自己と社会との関係を再構成する条件である「メタ・ライフ・ポリティクス」の確立が求められる。「ライフ・ポリティクス」（ギデンズ 1991）は「人生をいかに生きるべきか」という道徳的・倫理的問題に対して選択とライフスタイルを通じて自己選択・自己実現の権利を主張する政治を指す。だが自己選択や自己実現の機会や可能性あるいはリスク（ベック 1985）は等しく配分されていない。そのため、自己決定に向けて「社会」からサポートを受けつつ、他者との連帯や信頼を取り戻し、能動的にアイデンティティを構築し、ライフスタイルを選択し、傷ついた自己の主体性を回復できる、メタレベルの前提条件の整備が必要となる。

(3) これは子ども社会においても例外ではない。小学生や中学生の場合、社会との連帯や他者に対する信頼を通して自己肯定感を高め、逸脱行動の抑止も可能であろうし、高校生の場合にはそれらも含めて進路選択においても有効な知となる。これは若年失業者問題をせまき経済や労働の問題にとどめず、ひろく社会全体の問題として捉えなおす契機を与えるものとなる。

(4) さらに、教育政策批判に向けた知として、昨今の教育改革（心の教育など）が、社会的紐帯を弱め、子どもたちの利己主義や排他的ナショナリズムと結びついてしまう危険性、教師と子どもとの人間関係の破壊や学校教育の崩壊につながる可能性を指摘する。以上の研究成果をもとに、子どもたちの身近な人間関係を含め社会的紐帯の回復に向けた臨床的な実践とそれに必要な社会学理論を提示する。

3. 研究方法

(1) 初年度(1年目)は文献調査や資料分析を中心とする国家の保守化や社会の個人化に関する理論的検討、2年目は学校教員または児童・生徒に対するインタビュー調査と質問紙調査の実施(実証研究)とその分析結果の公表、3年目は学校教員と協働し、子どもたちの「社会的紐帯」「メタ・ライフ・ポリティクス」の復権を目指したワークショップの実践、4年目は以上の分析や実践を発展させて、研究成果を総括する。

4. 研究成果

本研究課題の方法と進捗状況を、先の(1)理論研究、(2)実証研究、(3)臨床的実践にわけて論じる。

(1) 理論研究・・・1980年代以降の日本社会の個人化と保守化の進行に関して、日の丸・君が代問題や教育基本法改正問題をもとに、グローバル化と革新勢力の衰退に伴う保守化の問題として捉えなおす。新自由主義—個人化、あるいは新保守主義—保守化という対関係から、相互の関係を捉え、以下の実証研究に向けた理論枠組みを構築した。

(2) 実証研究・・・今回の調査対象者となる児童・生徒は90年代の保守化と個人化の狭間で社会化されてきた。しかし、すべての対象者が「愛国者」であり、個人化するわけではないだろう。分析結果、学校・家庭・地域社会などとの社会的紐帯が強いものほど、愛国心の度合いが高まること明らかになった。

(3) 臨床的実践・・・本研究の特色は分析結果を学校現場や市民社会に還元し、現場の教師や児童・生徒と共有し、臨床の知の方法・理論を発展させることにある。それは市民講座や高校生対象の講座・講演におけ

るワークショップ等を通じて実践した。さらに、2011年度には共著で『スタディスキルズ・トレーニング』(実教出版)を刊行し、そのなかでも大学の教職員や友人・仲間との社会的な関係づくりに関わる章を担当し、社会的紐帯の復権を目指すうえで実践的な内容となり、当初の研究目的のひとつである臨床的貢献を果たしている。

(4) なお、当初の研究計画では、初年度(2008年度)の理論的検討を踏まえて、次年度(2009年度)にはインタビュー調査と質問紙調査を実施する予定であった。ところが、新型インフルエンザの影響で調査の継続が困難になってしまった。また、調査予定の学校側の諸事情により、質問紙調査の実施が困難になるなどの問題に直面した。インタビュー調査は2010年度に別の学校で教師や子どもたちを対象に実施できた。研究計画にも記載したとおり、当初予定されていた計画が進まない場合の代替案として、東京大学社会科学研究所附属データアーカイブ等の個票を利用することで当初の研究計画をおおむね達成することができたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① 小針 誠、高度経済成長期における家族と家族のおこなう教育——大衆教育社会における家族の格差と子どもの教育の不平等——、同志社女子大学 学術研究年報、査読有、Vol.62、2011、pp.71～81

② 小針 誠、現代の高校生における「ぷちナショナリズム」意識——国際試合の応援等にみられる高校生の「日本」をめぐる態度や意識に関する研究——、同志社女

子大学 総合文化研究所紀要、査読有、
Vol.28、2011、pp.69-79

- ③小針 誠、ネットいじめの完全撲滅は可能か？—学校裏サイト・ネットいじめの対策・対応とその課題—、加納寛子編、現代のエスプリ 特集・ネットいじめ、査読無、ぎょうせい、2011、pp.127-135
- ④小針 誠、中学生は「日本を愛している」のか？——保守化する現代日本における中学生と愛国心——、同志社女子大学総合文化研究所紀要、査読有、Vol.26、2009、pp.43-54
- ⑤小針 誠、学校式典（入学式・卒業式）における日の丸・君が代実施の規定要因——実施率の上昇（80年代）から完全実施（90年代）に向けて——、同志社女子大学学術研究年報、査読有、Vol.60、2009、pp.31~41

[学会発表] (計 3 件)

- ①小針 誠、近代学校と教育の公共世界、第101回京都フォーラム「公共世界としての学校」、2011年3月26日、於：神戸ポートピアホテル
- ②小針 誠、学校裏サイト等からみる子どもたちの友人関係～いわゆる「ネットいじめ」問題を中心に～、日本子ども社会学会、2009年7月4日、於：中国学園大学
- ③小針 誠、学校裏サイトの問題整理、日本子ども社会学会、2008年6月29日、於：松山大学

[図書] (計 5 件)

- ①吉原恵子・間瀬泰尚・富江英俊・小針 誠、スタディスキルズ・トレーニング 大学で学ぶための25のスキル、実教出版、2011、pp.7-26
- ②小針 誠、日常のリアルなコミュニケーションが鍵になる、原清治・山内乾史編、ネットいじめはなぜ「痛い」のか、ミネルヴァ書房、2011、pp.189~221
- ③小針 誠、子どもと家庭教育、武内清・岩田弘三編、子ども・若者の文化と教育、放送大学教育振興会、2011、pp.35~47
- ④小針 誠、学校裏サイトにおける「ネットいじめ」の構造と対策、深谷昌志・深谷和子・高旗正人編、ユビキタス社会の中の子どもの成長、ハーベスト社、2010、67-74 頁
- ⑤小針 誠、世織書房、〈お受験〉の社会史 都市新中間層と私立小学校、2009年、1-340 頁 + i ~vii

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小針 誠 (KOBARI MAKOTO)

同志社女子大学・現代社会学部・准教授
研究者番号：90388067

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：